
小説家になろうになぜ現役の小説家のおれがいるのか『十八歳のオメガ』ver6.0

鏡征爾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説家になろうになぜ現役の小説家のおれがいるのか『十八歳のオメガ』ver6.0

【Nコード】

N8026Y

【作者名】

鏡征爾

【あらすじ】

永遠はここにある

（前書き）

鏡征爾

第五回講談社b o x新人賞にて初の大賞を受賞

『白の断章』でデビュー

群像、ユリイカにエッセイ

なぜ現役の小説家が小説家になろうで連載をするのか、

【十八歳のオメガ】

白。灰。藍。紫。赤。黄。緑。橙。白。

光の断層が覗いている。

眼球の底からとめどなくあふれて、視覚の裏側で閉じていく。

涙ににじんで虹色のスペクトルとなって輝き、水晶体のうちがわで爆発して、薔薇型の傷痕を魂に刻みつけて氷結する。

ぼくは歌おうとしている。

くちびるから吐きだした音の符号が白い鳩となって羽ばたき、言葉

のエーテルが天体を炸裂させ、舌先から植物のマシンガンが芽吹く
というのは幻想だ。

調律すら十分にどこされていないその叫びは歌にもならない。
長調と短調の区別は溶け出し、フーガは液状化して逆流する。
時間の配列が破壊される。
言葉は閉ざされる。

残らない。

そこにあるのは、ただ不完全な衝動だ。

爛れて使い物にならない舌をゆるしてほしい。
それでもぼくはまだ何かを欲しがっていて、その声を、あの唇を、
この伽藍堂の胸腔をふるわせて、歌おうとして、ノドをおさえて、
胸を引き裂いてあがいてる。

光なんて、しらないと思っていた。

P r o l o g u e

出会わなければ殺戮の天使でいられたのに

歌声が透明な言葉の槍となって、頭上に閃く。

幻聴ではない。どこかなつかしくもの哀しい耳に聞きおぼえのある歌が、様々にぶつかる音の隙間からこぼれてこめかみに降りそそぎ、氷の繭になる。織りこまれた鮮やかな記憶の糸で、自分をうちがわに閉じ込める。音の符号にあわせて頭上でぼたぼたと溶け出し、足元に冷たい湖面をつくる。

自分が重力に磔にされていることを強く感じる。

僕は包帯のまかれた腕でからだを抱きしめ、両手で耳をふさいだ。寒さのせいか、痙攣するのどのせいか、指先に力が入らない。こみあげてくるのは、吐き気だけだ。歌声がぶつぶつと背中に発疹をつくりあげる。

僕はさらに強く、かたく、きつく、からだを抱きしめ、両腕で胸元に十字をつくった。コンクリートの匂いが、鼻先を舐める。前のめりに倒れこむ。

兆候は、いつも左肩だ。

心臓とつながる片腕のつけねに重い圧迫を感じ、自分とからだの連結がばらばらになる。認識したときには、すでに衝動が始まっている。

歌声のうかがわから誰かのあえぎがきこえる。呼吸が苦しくて、強く吸いこもうとすればするほど、酸素はくちびるからこぼれていく。瞳孔が収縮し、視界が暗転して、景色の裏側に失ったはずの情景があふれだす。

背中で脈打つ草と土と花の匂い。

ふくらはぎを浸す水の感触。

白い肌とあかいくちびる。

それらすべてがなまぐさいミルク色の舌ざわりとともに蘇り、心臓の扉を押し広げる。

錆びた鉄の匂いがして、濃厚な蜜の記憶の邪魔をする。噛みしめた口元から、血がこぼれていることに気付く。

あかく波形を描きながら広がっていく。

誰かの熱を求めるように。

のばされた小さな手が、護身用のスタンガンを握りしめる。ひんやりとした人工的な鉄の感触が、心を落ちつかせる。そしてどこにも自分の居場所などないのだと気付く。

巨大な液晶パネルに流行のミュージック・ビデオを映し出すガラス張りのビルには、おそらく昔好きだった少女の顔がクローズ・アップされていて、その細くしなやかな肢体と、低俗で無垢な無表情とが、きつと自分を裏切るだろう。

俺は死んでいる。俺は死んでいる。

僕は独り言のように繰り返して、目をあけた。

雪が降り始めていた。

白。

橙。緑。黄。赤。紫。藍。灰。白。

少女の歌声にあわせて踊るように。

空から、スクリーンのうえを流れる映像の光に照らされた七色の雪が、ゆっくりと降りてくる。

あたまのうしろに、白く焼きつく。

焦げついて弾ける。

ポコッ。

血が、こめかみのそばで飛沫をあげる。

泡立つ鮮血に顔を押しつける。

汚れた地面に這いつくばって、うす目をあけて空を見上げる。

天上から永遠になった少女の歌声が、恩寵のように降りそそぐ。

忘れないで。

十二月の渋谷だった。

人通りの多い道玄坂のふもとの、クリスマス商戦でにぎわう109前の広場で、冷たい壁に背中を押しつけたまま両足を投げだしている生ゴミ。

それが僕だった。

足元には端の折れ曲がったセレクトショップの紙バッグが置かれていて、なかからは歌詞の書かれた楽譜と、サラサの0.5mmクリップと、ハイブランドの首あてと、こめかみの火傷の文身の痕を隠すメンディング・テープと、シャネルのセブルガの白い財布と、キットラーの論文と　そして塗装の剥げたスタンガンが覗いている。これが自分だ、と思う。これが自分のすべてだ、と思う。隣人の女からもらったエルメスのベルトもヴィトンのダミエも、本物かどうか疑わしいパシャもすべて売ってしまった。

顔の側面に血がこびりついている。

指先を這わせ、第二関節から下側をすっぱりと覆う、アームウォーマーを汚さないように拭きとる。

こめかみの傷は、まだ痛んだ。

地面に突っ伏していたのは、五分くらいだったと思う。

あたまの上で通り過ぎるたくさんの靴音は、誰も助け起こそうとはしない。

声をかけてくるのは、利用する時だけだということにはわかっている。足元のタイル張りの地面が黒く塗り潰され、顔を上げる。

「きみ、かわいいね」

中年の男が笑っている。

血のこびりついた指を、あいまいに上下させて、答える。

十四、五トーンの金色の髪。あかるく染めてから、こういうことが増えた。

都心よりは郊外に多く、外人の場合はたいてい性別を間違えている。頬に張りつくミディアム・ボブの髪を、指先で弄びながら立ち上がる。

かなり傷んでいる。

ミルクティー色の髪色に憧れてアッシュでくすませたが、洗い流す

度に暖色系の色味が強く出てしまう。
理想にはほど遠い。

ガラス張りのツタヤのビルの五階。
一時期よく通った、ワイアード・カフェの入っている、書籍フロアの奥。

グラフィックの綺麗な装丁ばかり並べられた本棚の、奥へ奥へと進むたびに、視界の上下動が大きくなる。足がふるえて、時間がゆっくりと流れていく。

だがそれは、これからやろうとしていることのせいじゃない。

いつもこの場所にくると、自分が数年前の、夏の日に戻ったような錯覚に陥る。

彼女とふざけて入った、個室トイレでの遊びを思い出す。馬鹿みただが、今ではとても大切な、もう二度と手に入らない記憶だ。

それでも僕は、いつもこの場所を指定した。

一年前に自殺した女性ヴォーカリストのポスターが入り口に貼られた、トイレの奥。

下水の腐臭が、呼吸をふさぐ。

男と個室に入り、鍵を締める。

便座のフタをおろし、そのうえに飛びのる。

便器の後ろの、少し高い場所に取りつけられた台のうえに腰かける。そしてズボンのチャックをゆっくりとさげていく。

男の息は、すでにあがっていた。汚れた便座に四つん這いになって首を持ち上げ、僕の股間を凝視している。

先の白っぽい、薔薇色の性器がむきだしになる。僕は自分のそれを片手でつかんだ。吐きだしたガムみたいな柔らかい性器の感触が、左手の親指と中指と人差し指の第二第三関節に沈みこむ。あ。指の隙間に空洞をつくり、ゆっくり、ゆっくりと上下させる。あ。あ。思わず声がこぼれる。じきに心地の良いしびれが股の付け根の方からあがってきて、胸にあたたかいものが流れ出し、熱が徐々に下腹

部に籠っていく。あ。あ。あ。

男は固唾をのんで見守っていた。からみつく視線はしだいに実体を失って、微睡にも似た生ぬるい意識の膜の向こう側で掻き消される。すぐに気にならなくなる。白く濁った透明な呼気の幕がまぶたにおるされ、何もみえなくなる。

そのあいだ、ずっとあの歌が鳴っている。

永遠になった少女の歌。冷たく柔らかく繊細で、耳腔のうちがわに浸透していくハスキーな声。だが詩のフレーズは、なぜか抜け落ちている。

自分が誰よりも知っている言葉のはずなのに。

あえぎがのどに引っかかって、我にかえる。男の顔がいつのまにかすぐ近くにある。下顎を突き出し、大きく口をあけて、何かを乞うように待っている。太ももに向かつてのばされた男の毛だらけの手を見て、

さわんじゃねえよ。

僕はどなって、肩口を蹴り飛ばした。

足がつかまれる。男はそのまま僕を引き摺り下ろそうとする。僕は何度も何度も顔面を蹴った。だが硬いジーンズの繊維がふとももにひっかかって、うまく力を籠めることができない。

ずるずると音をたてて自分が便器の方へ滑っていくのがわかる。がむしゃらに手を振りまわす。両膝のつけねをつかまれる。背すじに鳥肌が浮かび、横隔膜にふるえが走る。

いつのまにか天井を見上げている。男の顔が股間に近づく。荒々しく吐き出された呼気を、剥き出しの下腹部に感じる、性器を頼張ろうとしてくる、さらに口を突き出す。僕はわざと指に力をこめた。その瞬間、白く濁った液体が放出された。男の顔にかかった。時間が止まった。男は僕の不意打ちに茫然としてまぶたをしばたいた。吐息が遠ざかる。毛深い手が、自分の太ももから離される。粘度の高いケロイド状の物体が、額から分厚いくちびるへ張りついている。だが男は上目遣いのまま頬を上気させ、嬉しそうに、とても嬉しそう

うに口元を歪めて、性液を舌で舐めとりながら、

笑っている。

その瞬間、意識が飛んでしまった。

ガンッ

壊れた天井のあかい照明が点滅している。

振り仰いで、鮮血が目蓋に飛び散ったのだと気付く。目尻を指でぬぐって、視界がさらにあかく染まる。眼球がジクジクと痛んで手の甲のしびれに気付く。指先の皮がずるむけている。肩こしが打撃の余韻でずっしりと重く、肘がガクガクと痙攣する。ああ、これはくちびるのふるえだ。悪寒が全身を包んでいる。

殴っていた、

ガンッ

音の余韻が、からだに心地の良いリズムを刻む。閃光のような恍惚が肩こしで弾け、あたまのうしろから背すじのあたりに鳥肌をたてて炸裂する。僕は衝動的に男の顔を殴っていた。指先の骨がひしやげて、心臓の鼓動がドクドクと聞こえる。意識にあかい膜が垂れこめ、視界が急速に閉じていく。誰かのどなり声が膜の外側からきこえてくる。これまで聞いたことのないおそろしく低い声で、それが自分の口からこぼれた叫びだと気付くまで時間がかかった。

お前が殺したんだ。

お前らが殺したんだ。

何度も何度もそうとなっている。自分でもよく意味がわからない。

男とは今日初めて会ったばかりだ、

「ひ、何いって、」

狂ってる。

そう悲鳴をあげて、男は個室のドアから逃げようとする。うしろから襟首を掴んで、備え付けのトイレットペーパーの金属部の金具に叩きつける。男の悲鳴がテープの回転数をダウンさせたノイズのざわめきになる。骨が潰れる音がする。何度も何度も叩きつける。便座のフタのうえに仰向けにして、感覚のうすれた拳でさらに殴り

つける。フタが割れる。バキバキと凄まじい音が鼓膜の左右で割れていき痛覚が沈み込む。激痛の果てに途絶える。僕は暴走している。殴る。殴る。殴る殴る殴る殴る殴る。衝動のおもむくまま腕を振り下ろす。からだと心のつながりがバラバラに裂けていく。顔が歪む。自分のくちびるが上向きに吊り上がっていくのがわかる。そこから先の記憶は抜けている。

ごめんなさい……。

声が聞こえる。

ごめんなさい……。

ぽたぽたと滴り落ちる水の音。拳から垂れる血の音に混じって、視界の下方で声が聞こえてくる。男はスーツを大量の鼻血で汚し、顔をおさえて泣きながら謝っている。ごめんなさい、ごめんなさい……。トイレのタイル張りの床に倒れ込みながら震えている。僕はそれを見下ろしている。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……。はあはあと喉元で鳴り響く呼吸音。肩が上下して、こみあがる吐き気を抑えることができない。ここは息苦しい。

酸素がたりない。

ツタヤが出る。

じぶんの靴音があとからついてくる。

それ以外の音はきこえない。

フロアにながれるノイズも、スターバックスのバリスタの声も、エスカレーターの電子音も、無声の環境音楽のように液化してまわりでゆっくり溶けていく。

外に出る。凄まじい都市の腐臭が鼻腔を貫く。

白い地面。

地下鉄の壁。

つみ上げられたゴミの山。

僕は、無意識のうちにスタンガンをこめかみにおしあてていた。電源のスイッチを指でおさえ、だが、その姿勢のまま固まった。

雪だ。

ひとすじの白い雪が目の前を浮かび、流れてくる。

美しい雪だ。

時間が止まって、それでも流れた。

目を澄ませ、心を透きとおらせるこの雪が、今度は自分を傷つける。意識にかかったノイズの膜を斑状にとりのぞいて、それまで擦りガラスごしにみえていた　胸底の生ま生ましい感情を露出させる。

あの日も雪が降っていた。

僕は浮かび上がった記憶を拒絶するように、衝動的に、ああ、と叫んだ。

だが、声は聞こえなかった。呼気のカタマリが視界を一層白く濁らせ、雪の記憶はさらに強く、鮮やかに浮上した。不意に息苦しさを感じ、僕は瘡蓋だらけの指で胸を押さえて、もう一度叫んだ。それでも、叫びは聞こえなかった。雪が、呼気が、地上を取り囲む建物がさらに白くなった。

気付けばのどを押さえてうずくまり、ああ、ああ、ああ、ああと空に向かって叫んでいた。

シオン

痛みは私を満たしてくれますか?? Xenosaga?

色とりどりの飲食店の窓が、頭上に電飾の断層となって積み上がる。影は人波に揺れて、光をシャッフルする。天蓋のようにのびる山手線。渋谷のスクランブル交差点の地面の下では、地下鉄の東京メトロが縦横を行き交い、五芒星をえがく。大盛堂書店のブルーの看板の向かい。ガラスのビルを背に、コントラストの強い服を着た人々が黒々と浮かび上がる。ここでは自動車の存在感は驚くほど希薄だ。自分たちをとりかこむ巨大な電飾のピラミッドの下で、地を這う蟻のように動いている。

第一章

1

色とりどりの飲食店の窓が、頭上に電飾の断層となって積み上がる。影は人波に揺れて、光をシャッフルする。天蓋のようにのびる山手線。渋谷のスクランブル交差点の地面の下では、地下鉄の東京メトロが縦横を行き交い、五芒星をえがく。大盛堂書店のブルーの看板の向かい。ガラスのビルを背に、コントラストの強い服を着た人々が黒々と浮かび上がる。ここでは自動車の存在感は驚くほど希薄だ。自分たちをとりかこむ巨大な電飾のピラミッドの下で、地を這う蟻のように動いている。

2

自動車の蟻の影が、ゆっくりと裂けていく。

都市の底にぽつぽつと浮かぶ光が、白い帯となっておしひろげられる。

爆音が流れる。

交差点の向かいの通りから、優美で女性的なボディラインからは想像もつかないほどのエンジン音を響かせて、シャンパン・ゴールドのランボルギーニが翔けてくる。

目の前に停車し、ガリウイング式のドアがひらく。

車道側にまわりこみ、何もいわずリアシートに乗りこむ。重心が低い。

「馬鹿だ……」

頬杖を突きながらつぶやく。

井の頭線の高架下を通り抜ける。

こちらを指差すたくさんの人々の顔が、視界の左右で流れていく。

「目立つのはきらいか？」

挙動の安定しない車を、器用に乗りこなしながら、龍爾は笑った。

ドルチェ&ガッバーナの黒いフード付のパーカーを、頭から直接肌に羽織っている。よく末端の暴力団系組織のネゴシエーターが着ているやつだ。

なめらかな陶器のような白い肌。そのうえをすべる都市のあかりが、目元のシャネルのサングラスのうえで弾けて四方に散る。

ハンドルを握る手は小さく、指は細い。華奢な体躯。ブドワールの香水が少しきつい。

女にでも乗せてもらっている気になる。

「まだひきずつてるのか？」

そっぴいながらダブルクラッチを華麗にきめて、ラップをかける。が、耳のすぐうしろで呻りをあげる凄まじい爆音のせいで、まったく聴こえない。

エンジンは横置ききの12気筒ミッドシップ。背中でパンパン鳴り響

くバックファイヤーが、ピストル自殺を連想させる。

「お前は破滅に向かってる。馬鹿な真似をして、自分の才能を焼き尽くしている。こめかみをみせる、もう言葉がうまく出てこなくなってるんだろ？」

僕は答えない。

「いい加減に目を覚ませ。マリア（アレ）は お前が考えていたような女じゃない。インディーズ・チャートの首位なんて掃いて捨てるほどいる。人間は取り替えがきくんだ」

橋を渡る。車体の先端から座席の後方に向かって波打つようにせりあがるランボルギーニ・ミウラのデザインは、シートにおさめられた肉体を上方に傾けさせる。視界の左右で光が割れていき、陸橋の頂上をこえると、あたかも空を飛んでいるような錯覚に陥る。

「もう忘れる。お前のせいじゃない」

僕は爆音に身をゆだねながら黙っていた。

龍爾は小説家だ。

まだ二十代半ばの若手で、デビューしてから数年しか経っていないが、十代二十代の若者のあいだに熱狂的な人気を誇る。だがマスコミ受けする派手な容姿や発言を差し引いても、その実力は相当なものだ。

文章は美しく流麗。にもかかわらずわかりやすく、それでいて圧倒的な破壊力を秘めている。この車みたいな作品だ。

そして才能はあるが、才能のある人間によくみられるように、人の気持ちと金の勘定ができない。

「このランボいくらすんの」沈黙を破って訊いた。

「億しないくらい、かな」

彼に会うまでは、作家がこんなにリッチな職業だとは思っていなかった。

「これ、タクシー代がわりね」

数時間前に手に入れた万札を一枚渡す。

自尉をみせるだけで、一万だった。正直安いのか高いのかわからない。

どうでもいい。

「シャンパン代こみで？」

すくないな、と文句をいって、確認もせずに受けとる。

「おれは飲まないもん」

今日はそんな気分じゃない。

手の甲は、まだ痛んだ。

歌舞伎町のうらにある病院で、痛み止めの薬も貰ってきた。渋谷だと相手を殴った場所からあまりに近く、不安だった。

「それに、明日は学校がある」

週に一度だけ参加する、ゼミの日だ。

学者になる道は、今ではほとんど閉ざされてはいる。

だが、せめて卒業くらいはしないと、という思いがあることも、事実だった。

「本郷？」

僕は頷いた。

「じゃあ近く泊るから送ってやるよ。どうせオールするだろ？」

片手をひらひらさせて答える。

わざわざオール明けの昼に学校まで送ってもらうことを、べつだん悪いとは思わない。

たぶん、後樂園のそばの東京ドームシティ・ホテルに泊まるのだろうと思う。

大阪から来た人妻と会うのだと、以前言っていた。

「もう詩はできたのか？」

僕は黙った。

切り取られた惑星が眼下に広がる。

濡れた漆黒の湖面に天体を浮かべたような電飾の星々が散る、高層マンションの窓から、地上を見下ろす。

高いところは好きだ。

頭上に飛び交う音が、届かないから。

近づける気が、するから。

目の前にこちらを見つめる顔がある。

大きく肩の食み出た、ダメージ加工の施された中性的なニットを、地肌に直接身につけている。首もとにはゴールドのヘッドフォンみたいな、ハイブランドの首あてをしている。

どこか覚めた印象を与える、奥二重ぎみの目。色のうすい肌。こめかみに浮かぶ、黒い蝶の自傷痕。

自分の顔。

ガラスに映る顔が白く染まる。思わずうめいて、屈みこむ。

「それで車から放り出されたの？」

耳の近くで、くすくすと笑う声がする。粘ついた唾液の音がからんで、耳裏のうぶげをふるわせる。どこかできいたことのある音だ、と思う。

自分が一瞬、過去に引き戻されたように感じる。

だが甘く噛まれた耳たぶの感触で、それが錯覚にすぎないのだと気付く。

もつとかるく、深かった。痛みがあった。彼女には八重歯があった。それを気にしていた。抜くと輪郭が変わってしまうかもしれないと、鏡台の前で、アメニティの袋をいじりながら、悩んでいた。

「セイラ」

名前を呼んで、会話を続ける。

「流石に予想はしなかった」

ざらざらした生ぬるい感触が首すじを流れる。濡れた舌が背を這う。「あいつは仕事には異常にストイックな男だけれど、他人には干渉しない主義なんだ。唯一口を出してくるとしたら、自分の作品に関わるものだけだ。だから珍しいけど、でもきつとあいつは、単に自分が渋谷に戻りたかったただだ。お気に入りのテラス席でビッグマックが食べたかったただなんだよ」

終わったら迎えにくる。

マルイシテイ前で下ろされた後、そういつて別れたが、たぶん明け方まで電話をチェックするしないだろう。西麻布の会員制のクラブで、今頃はモデルたちと踊っているはずだ。

どうでもいい。

付き合いだとわかつてはいても、僕はそういつた遊びがあまり好きになれない。痛々しいとさえ感じている。

それに、華やかで美しいものを見れば見るほど、自分が惨めになるだけだ。

4

僕は、歌詞をつくる作家だった。

大学院在学中の二十三歳のときに書いた詩が、レコード会社の目に留まった。

音楽出版社と共同で主催した賞を受賞して、エージェント契約を結んだ。新米のマネージャーもついた。契約料は百五十万だった。

言葉を紡ぐのには、困らなかった。

デビュー直後は、洪水のように言葉が降りてきてとまらず、たくさんの候補のなかから、聴いた人間の情動を最大化させるフレーズを選ぶのに苦勞する。そんな神秘的な体験の連続だった。

いつも数分かそこらで、自動筆記のようにして書いた。

一介の作詞家なので、芸能人のように都市を歩いていて声をかけられることは流石にないが、呼ばれたクラブイベントで楽曲とともに紹介されれば、三割くらいの人が頷き、また好意的に迎えてくれた。

すべて過去の話だ。

5

「はい」

セイラがプラスチックのケースに入った粉末を、吸引用スティックとともにうしろから差し出す。錠剤を砕いたものだが、色が黒く濁っている。

粉末を吸いこんでから、ミントで流し、喉の粘膜に張りつける。

おそらくいろんなタイプの錠剤が混ざっていて、何が入っているのかすでに本人もわからないのだろうと思う。とはいえせいぜい精神科で処方されるレベルの、たいしたことのない代物だ。調律剤は嗜む程度でいい。

リリー、どこにいるんだ、リリー。パイナップルがみえないよ。

そういう時代は終わった。

彼女は、国際的に活躍する建築家の一人娘だ。

以前、目白のマンションの、隣の部屋に住んでいた。

酔っ払った状態で深夜にインターホンを連打されたり、在日朝鮮人の彼氏と取っ組み合いのケンカをして泣いているところに水を持って行ってやつたりしているうちに、自然と仲良くなった。共通の知り合いもいた。

モデル仲間が多く、六本木界限のクラブに高校時代から出入りしているような連中の場合、龍爾みたいな派手な遊びをしている人間を辿れば、大抵どこかでつながっている。

人材は遍在する。金も遍在する。
おそらく金払いのいい男が何人かいるのだろうと思う。

生地のスきまから、胸元になめらかな腕がすべりこんでくる。

ネイルのついた指先で、肌を引っ掻く。手についてうなだれる自分の顔の横に、肌の透けた黒いニットに身を包んだ女の姿が、窓ガラスに映っている。

胸元のフリンジつきのチェーンネックレスが、電飾の闇に浮かびあがる。

「セイラ」

「なに」

「もう無理」

「今日はちゃんと脱がして。あ」

「なに」

「しばって」

それは、彼女の冗談だった。本当にそんなことをする必要がないことはわかっていた。

電飾の明かりが、ここまで届く。
雪の花びらが影になる。

拘束するまでもなく、自分たちは地上にしばりつけられている。

「今日はうたないでいいの？」

こめかみの火傷の傷痕に舌を這わせる。羽根を広げる、蝶の文身みたいな対の三角。

うつって、何を？

「とぼけないでよ」

そういつて、紙バッグからはみ出たスタンガンを指差す。

「でもあの話は嘘でしょ？」

何が。

ニットを脱ぎながら、答える。

「コトバを焼くって話。ゲンゴチュウスウ？こめかみにスタンガン
を撃ち込んで破壊するんでしょ？」

「馬鹿げてる」

自分でネックレスをはずそうとする彼女の腕を掴み、マットレスの
うえに押しつける。

多連ピアスのついた腹に、舌を這わせる。エナメル質な蛍光色の下
着が露わになる。

「あるときキズタカ、いつちゃってたよね。それは異界へのトラベ
ルなんでしょ、死んだ女に似たパーツに触れて導かれるんでしょ。
そこで一つずつ何かを潰してくって話。あれは何？妄言？幻覚？」

「嘘だよ」

ゆるく巻かれたながい髪が、頬のあたりで揺れている。ガラスの向
こうには、記憶のなかの少女に似た顔のシルエツトが、こちらを見
つめている。その白い肌ややメイクのつくりかたが、彼女の面影を
想起させる。

目を閉じる。

視界が真っ暗に染まって、煙草の匂いがする。

前方にのびしかけた、腕が止まる。ノアールだろうか。ピアノシ
モだろうか？

吸わない自分にはわからない。煙草の匂いが中年の男としてるみた
いで嫌だといったら、甘い残り香のするメンソールに変えてくれた
レコーディングのあとで、のどが哽れていた。夏の日で、雨が降っ
ていた。

別の誰かの声がする。

「まだ元力ノのことひきずってんの？」

時間が止まった。

手首を掴んだ。

押し倒して、ストッキングを引き千切った。

「馬鹿馬鹿しい、おれたちは別に付き合ってたわけじゃないんだよ
！」

怒鳴り声には、自分に対する侮蔑の色が混ざっていた。

付き合う。

元彼女。^{カノ}

恋人。

付き合うっていうのは、どういう意味なのだろう？

セックスしかなかった。

そしてそのことが今はたまらなくなしい。

6

勾配のきつい坂が視界を取り囲むチェーン店の路地裏。壁面を、汚れた水が流れている。

入り組んだ配線の隙間から腐食性のガスが立ち昇り、鼻腔をふさぐ。ここは湿っている。ひどくじめじめして日当たりが悪く、黴くさい苔がコンクリートの地面を覆っている。道の端には、昼間から誰かの吐瀉物が落ちている。

つくられたポップ・スターの広告が頭上に聳えて、ただでさえ少ない太陽の光を、さらに遮ってしまう。低くたれこめた灰色の空には、夥しい数の電線がぐるぐると張り巡らされ、視界を網状に切り分ける。

そしてその下には、真冬だというに肌を露出させた人々が息をして動いている。

人工的できらびやかな服を着たまだ若い少女たちが靴音を響かせて歩いている。

蛍光色のフリルとレースとストライプが冷たい都市の景観を彩り、

ガラスだらけのファッション・ストリートの壁に光と影の分身をつくる。ダブル

醜く汚い街。

狭苦しく、四方をなだらかな坂と建物と広告に包囲されている、いつまでも大人にならない街。都市に密閉された自己顕示欲の容れ物。

この街が嫌いだ。

それでも僕はいつもこの場所にて、誰かを待っていた。自分のような街だとさえ感じていた。

7

渋谷109前のカフェ。店内には、安っぽいJAZZが流れている。水滴のついたプラスチックのカップに手を伸ばし、くちびるを潤おす。

カウンター席のガラスに、自分の顔が亡霊のように映っている。プラスチックをもつ腕は、黒地のアームウォーマーに包まれている。生地表面には、絵具の顔料を散りばめたようなシルバー加工が施されている。

マリアに初めて会ったときも、確かこれを身につけていた。

きっかけは、対談だった。講談社のビルの最上階のラウンジの、柔らかなソファの上で彼女と向かい合ってから、すでに二年が経とうとしている。

一瞬だけ、父親の顔が浮かぶ。首を振って、ストローに口をつけてのどを潤す。

窓の向こうを談笑する人々の群れが流れていく。彼女に似た少女を探している自分に気付き、ペンを握る。

あまりサラサラ書けないサラサ・クリップを、楽譜の上に走らせる。二行。三行。四行。真黒なインクの染みがうすクリーム色の紙に網状に広がり、降りてきた詩のフレーズを、繊維の表面に刻みつけていく。ぐしゃぐしゃに塗り潰す。楽譜を突き破る。A4サイズの用紙を斜めに引き裂く。すぐに書けなくなる。

飛来してきたアイディアは、指先を走らせると途端に失われていき、分厚い意識のシールドの保護膜で自分をくるんでしまう。生々しい直観をはじいて、指先がふるえて、コトバがうまくあやつれなくなる。

視界がうごくほどしんぞうのこどろがはげしく脈打つ。何もかんがえられなくなる。

やめてしまう。

ページをめくり、日付を遡る。

斜体で殴り書きされた言葉は、時間を遡れば遡るほど筆跡は荒々しくみずみずしさを取り戻していき、美しく紙のうえを流れて、変幻自在になる。

手帳のカレンダーには、クランク・アップされたレコードのタイトルと、未発表の音源につける歌詞の膨大なリストが、丸バツの表記つきで記されていて、現在に近づくにつれバツの割合が増えていく。丸がゼロになる。

一番最初のページには、初めて他人に向けてつくった詩と、自分の名前が書いてある。ミシマキズタカ。

きみは、汚れてないよ。

視界の左右で濡れたネオンのあかりが滑っていく。

店を出てスクランブル交差点を渡る。談笑する人々の声が、自動車のクラクションが、ヒットチャートを賑わせる音楽が、ノイズとなつて分裂し、自分からどんどん遠ざかる。

TOKYUの駅ビルを右手に、広場を抜ける。天蓋のように頭上にのびる山手線の、薄暗い高架下へと潜っていく。深く。深く。闇のなかで、意識が内側に向く。ひきずつてゐるわけじゃない。思わずつぶやく。

交差させた細長く白い足。

耳に手をあてて流し見る、ちょっと小馬鹿にしたしぐさ。冷たい無表情のうらの、蛭のようになめらかなくちびる。別に、愛していたわけじゃない、呟いて、言いきかせる。

自分の最高傑作の歌詞を歌声にして、永遠の言葉を世界に残して死んだ、女のことなんて。

こめかみが疼いて、思わずスタンガンを握りしめる。

どうでもいい。

こうした葛藤も、もうすぐ終わりだ。

契約書にサインした残りの歌詞を片付けたら、詩のことは忘れる。

あと一つ、言葉を紡いで、すべてを終わらせる。

言葉では救えない。

9

言葉は、死の前では、無力だ。

死後の世界に届けることも、死にゆく者をこの世界に留めることもできない。

経験するまで、僕は誰かの死が、こんなにも重い最低の破壊だとは知らなかった。

彼女が自殺する、一週間ほど前だった。

父親の死が、じきに訪れる暗黒の世界の口火を切った。

死は軽い眩暈とともにやってくる。

その報せを、僕は渋谷のカフェでフラペチーノを飲みながら聞いた。

……ブク……仕事先で……ブク……倒れ……。

説明を聞いているあいだじゅう、あたまから水の抜かれる音がしていた。

搬送された病院は、都心から二時間もかかる隣県の田舎だった。

電車に乗り、繁華街から遠ざかれることに景色は暗くなった。

田園風景が黒々と視界を流れ、街道沿いに点在する灯りが狐火の葬列のように連綿と続いていた。

列車に揺られているあいだは始終葬儀や役所への死亡手続きや実家の手入れなどに、思いを巡らせていた。

ひどく現実感がなく、そのせいか悲しみもなかった。僕は薄情な人間だった。

暴力的で気難しい父親で、自分が中学の頃から離れた場所別々に暮らしていた。

父親は母親を僕にとられたとさえ感じていて、会ったたびに口論が絶えなかった。

だが酸素マスクをつけたその姿を目にして、何かが決壊した。

父親のからだはたった半日で別人のように衰弱していた。腕にはモルヒネと点滴の針を刺しこまれ、顔は土気色で、渴いたくちびるを天に向けてあえがせていた。

大動脈の破裂。助かる見こみはなかった。

今はクスリの力で夢をみている状態で、呼べば反応するが、目覚めさせると、苦しみを蘇らせることになる。だから、このまま安らかに眠らせてあげましよう、医師は説明した。

だが僕は父親の耳元で名前を叫び続けた。

反応はだんだん失われていき、五分もすると呼びかけに応じなくなつた。モルヒネの電子音と呼吸器の規則的な音ばかりが、耳に残つた。父親がそうであつたように、僕も父親を憎んでいた。暴力的で残酷で、最低の人間だつた。いなくなってくれればどれだけ幸せかと思つたこともある。

だがその時の僕は、これでもう二度と父親に会えなくなるのだという事実を受け入れることができなかった。自分の名前に反応しない父親の姿に戸惑つていた。そんな父親の姿を認めたくなかつた。理由もわからず、ただ息が苦しかった。

僕は枕元にしがみつながら父親の名前を叫び続けた。反応はしだいに失われていき、くちびるからこぼれる呼吸音は弱々しくなつた。僕は最後に、駄目元で父親の耳に叫んだ。とうさん、僕だ。キズタカだよ。「今までありがとう　愛してるよ」すると突然父親のからだがぶるぶるとふるえだした。僕は何かに打たれたようにしばらくのあいだその場に立ちつくしていた。あれから一年が過ぎ、そのときに胸を襲つた巨大な感情の正体が何だつたのかさえわからない…… 回想の闇に壊れた音楽が紛れ込む。

鉄の鳴る音が近づいた。僕はスタンガンに力を籠め、眼を閉じた。

ガゴン

ガゴン　ガンガン

頭上で列車が格納される。

自分が、一人じゃないんだつて気付く。

高架下を照らす電飾の明かりが、次第に限定されていく。

奥へ奥へと進むうちに地上のネオンの明かりが届かなくなる。

臍に揺れる光は目の高さで壁面を流れ、足を動かす度に上下する。音が消え色が消え意識が遠ざかつて、暗い闇の底に無数の光が増殖する。

コンクリートの壁がじきに黒光りする重厚なフロアの壁に置き換わる。

壁に映りこむ蠟燭のが視界を次々と流れ、白抜きの帯になる。立ち止まると景色も動きを止め、光は静止して固まる。

どんな試練にも私は耐えられる

パラノイアックな病人のように踊る人、人、人の列。

無心で歩き続けて いつの間にか、渋谷の外れにある 暗い日曜

日(M a r i a) に足を踏み入れていた。

死んだ彼女と同じ名前の箱だ。

コントローラーに機械的に曲を打ちこんだだけの洋楽の R e m i x。煌びやかな照明で、十代二十代の若者を閉じこめる地下の要塞。

こういう痛々しい場所は、嫌いだった。

だが、一人で眠ることができなくなってから、頻繁に足を運ぶようになっていた。

音と光の氾濫するフロアに身を委ねていると心地良かった。

朝まで踊っていれば、すべてを忘れられた。

強い者は決して倒れたりしない

デズリーが流れてる。

曲はトランス調に R e m i xされ、声には歪なエフェクトが掛けられて、見るも無残な姿に貶められていて だがその音色の美しさは決して変わらない。

……。

円卓に置かれたガラスの小瓶。

その底で静かに燃える煙草の炎が大理石の壁に映りこみ、極小の範

囲に連なつて、星々のように散っている。

その丸い光の集合は歩を進める度に無数の線となつて視界を流れ、明度を自在に移しながら目の高さでしばらく続く。

生きることは　こんなにも苦しい

フロアから射し込む照明の灯り。

人々の煌びやかなアクセサリー。

輝度を濁らせて光を反射させる、床の岩目の照り返し。

様々な光源の溶け合う壁が、流れる視界のなかで色調の安定を失つていく。

次々と画面右手に色を飛ばして、いくつもの空白をつくつて続いていく。

切ないこの痛み……

不意に闇のバランスが乱れる。

踊り場にさしかかったところで、僕は思わず、足を動かすのをやめていた。

光が止まった。

あなたは今どこにいるの？

いつのまにか大理石の壁がガラスの鏡面になつていて。

一對の完璧な肉体が、映っている。

少女だ。精巧な部品で組み上げられた人形のような少女が、鏡の前に立っていた。

ドレス調の黒のトップスからのぞく白い肌が流れる音楽みたいに存在している。

背中にはパーティ用のものなのか、人工的な羽根が取り付けられて

いる。

その場に凍りついていると、少女の切れ長の瞳が鏡面で対称を描いて、視線が合った。

心臓が、鳴っている。

僕は、胸を衝かれたように動けなかった。

切れ長の目。白い肌。高い鼻すじ。長い髪。華奢な首元。

完璧な、パーツだった。

彼女の姿は 死んだはずの少女に、あまりに似ていた。人形だと疑うほどだ。

鏡像のなかの瞳がこちらを見つめていて、それが次第に液状化していく。

口元のルージュが、光の角度を変える。くちびるが動く。

「なんで泣いてるの」

少しハスキーな低音の、耳に心地よく響く声。質問の意味が遅れてあたまに入ってくる。

泣いてなどいない。咄嗟にそう言おうとして、頬をおさえてはっとした。

悲しくも、嬉しくもなかった。感情の不安定な乱れの自覚は、まるでなかった。にもかかわらず自分の目からは涙が次々と流れて、とまらなかった。

あなたは今どこにいるの？

ここはどこなんだろう。僕はずっと考えている。

音楽はいつの間にか止んでいた。

彼女が細長い足を交差させた。動作の余波で柔らかかそうな髪が鎖骨にこぼれた。

その隙にも目から涙が次々とこぼれだし、両手の甲でぬぐっても、留めることができずに溢れてくる。嗚咽がして、その場にしゃがみこんでしまいそうになる。自分はなぜこんなに無様なのか。無意識

のうちに自分のくちびるから言葉がこぼれている。

「ずっと……」

少女が肩にこぼれた髪を耳にかけて、再びこちらを流し見る。無表情に、首を振る。

四つ打ちの音楽が切り替わる。重い音の衝撃で、腰が震える、

「ずっと……」

声が打ち消される。彼女がガラスの壁から離れる。

その華奢なからだがレインライトにくり抜かれて、放っておいたら、そのまま光の向こう側に言ってしまいそうな気がして。僕は思わず、
「ずっと……好きだった」

一度も伝えられなかった言葉を口にしていた。

出会わなければ殺戮の天使でいられたのに

口元に鏡をあててみる。曇ればまだ生きているはずだ。？ゴダールのリア王？

第二章

1

真白い壁の中央に、コンバット・ナイフで斜めに切り裂いた傷痕がある。

天井の四隅には、指で引き千切られた黒いタイツが、蜘蛛の巣みたいに打ちつけてある。
自分の部屋。

2

目をあけて、音の動きに身を委ねる。

暗闇が、四角い光にくりぬかれる。ヘッドライトの明かりが天井から壁へと流れていく。

鏡台のガラスにぶつかって、対の光源をつくりながら、別々の方角に遠ざかる。

自動車のタイヤの音が途絶えていく。窓枠の影が部屋の隅に消える。

薄暗い部屋に仰向けになりながら、僕は、昨晚の少女のことを思い出していた。

週末の、暗い日曜日。背に天使の羽根をつけた、死んだ彼女と瓜二つの少女。

出会った瞬間、僕は好きだと告げた後、結婚しようなどと口走って、遁走した。

彼女は、いつもあの場所に来ているのか。それとも、自分の見た幻だったのだろうか？

手のひらで顔を押さえる。指でまぶたを圧迫する。
灰色に滲んだ、斑な水が浮かびあがる。

どうかしている。

3

109前の広場を通り過ぎる。

雑誌の読者モデルの少女が出てきて、人だかりができる。

クリスマス前のせいかな、自分が一人きりなせいかな、恋人たちの姿が
とてもよく目につく。

道玄坂の麓のいつものカフェ。いつものカウンター席に荷物を下ろす。

レジでコーヒーを注文し、ポケットから灰色の財布を取り出す。

うす汚れた、シャネルのセブルガ。彼女に初めてプレゼントした遺品だ。金を出し入れするたびに黒ずんでいく。

小銭を取り出しながら、思う。

財布を買ったばかりの頃、彼女と自分の肌は、ハイブランドの売り物のようにみずみずしく輝いていたのに、今では記憶のなかの彼女の姿も自分のからだも、水が澱むように濁ってみえる。

自分と彼女が掲載された雑誌が、色褪せるように。

対談の最中、ソファの向こう側に不気味な微笑を張りつけてこちらを見つめていた、父親の姿を思い出す。

それは、彼の紹介でセットされた企画だった。

父親は、当時レコード会社のプロデューサーをやっていた。デビュー直後のマリアの担当で、彼女にマリアというアーティスト命をつけたのも彼だった。

なぜ本名ともまるで関係のない、そんな名前をつけたのか、未だに謎だ。

だが、おそらく歌姫ディーヴァのイメージと聖母の像を重ねたのだろうと思う。

どうでもいい。

反射的にくちびるで打ち消し、ケータイにイヤホンのプラグを接続する。音楽を流しながら楽譜を取り出し、ペンを握る。

指先がふるえて、不可思議な動悸がする。舌の付け根に甘酸っぱいしびれがのぼってくる。

一行も書けない。

ペンを床に落としてしまう。

拾う気さえ、起こらない。

4

何かを書くこと。

現代を生きる人間にとって、それはあまりに無意味だった。

何も与えてはくれなかった。自分を、自分の大切なものを、守つてもくれなかった。

自分のつくりだす言葉に幻滅してから、靈感は急速に途絶えていった。

流麗だった韻律はぎこちなくなり 閃光のようだったメタファーは閉塞感に満ち、のびやかだった詩句のフレーズは重い筋肉の鎧をまとったようにみずみずしさを失っていった。

友人たちは、一人また一人と去っていった。

収入もめっきり減った。

以前は、才能のない人間のやる仕事だと馬鹿にしていたコマーシャルソングや、タレント系アーティストのゴーストが主な収入源になった。

言葉を紡ぎだす喜びは、もはやなかった。

そんなものは、最初からなかったのだ。

【了？】

（引用歌詞：prologue：一行目：「創聖のアクエリオン」岩里祐穂）

（引用歌詞：第一章：最終行：「創聖のアクエリオン」岩里祐穂）

（引用歌詞：第一章：10：161,72,83,91,97,117「Kissing You」Tim Attack, Des'ree：翻訳：松浦美奈）

(後書き)

続きがきになっていただけなら
ぜひツイッター

<http://twitter.com/kagamiseiji>

をフォローしつたえてください

未来と

ひとつなげる

それだけがささえです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026y/>

小説家になろうになぜ現役の小説家のおれがいるのか『十八歳のオメガ』ver6

2011年11月23日21時53分発行